

朝鮮半島問題特別報道：中国の“換人計画”と金正男の暗殺

漢和防務評論 20170531(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

北朝鮮のミサイル発射をテレビのワイドショーが異常なほど喧伝するので、金正男の暗殺事件は過去の事件になってしまいました。

漢和防務評論は、2017年5月31日号の記事で、金正男暗殺事件の背景を特集記事にしました。

同記事の主旨は、中国は北朝鮮の核やミサイル開発によって脅威を感じるようになった。中朝関係が質的に変化し、中国は、北朝鮮を仮想敵国と考えるようになった。中国には北朝鮮の政権転覆計画”換人計画”があり、その圧力を感じた金正恩が金正男の排除を急いだ、というものです。

第二次大戦末期にヒトラーが自暴自棄になって自滅の道を選ぼうとしたように、金正恩が報復を恐れず、核爆弾を使用することを漢和は危惧しています。

平可夫

2017年2月、金正日の長男金正男はクアラルンプール国際空港で毒物攻撃を受け、暗殺された。2名の女性殺人者に接触していた4名の容疑者は直ちに北朝鮮に逃亡した。事件発生後、KDR総編集は、多くの国際メディアの取材を受けた際に、次のように述べた：

1. 暗殺手段は、典型的な KGB 方式である。高水準の毒薬を使用している。類似の毒薬は、調合して得られるものであり、国家レベルの実験室でのみ類似の毒薬と解毒剤を製作することができる。また殺人者は事前に解毒剤を服用する必要がある。手法から見ると、1958年、KGBの殺人者 STASINSKY がウクライナの民族主義者 BANDALA を暗殺した手法に酷似している。死者の症状は心臓麻痺である。体内に毒薬は残らない。

ここで簡単に説明すると、社会主義国家のスパイ、情報組織、粛清運動の基本思想、理論、手段は、全てソ連時代の CHIKA の”国家政治保衛”を手本にしている。暗殺工作機構は高度に集中管理され、ソ連は、GRU 及び KGB を含む巨大なスパイシステムを保有していた。しかし暗殺工作は KGB 第12局だけが担当して、”潮湿工作”(LIQUID AFFAIR) と呼称した。米国が保有する巨大なスパイシステムは、1960年代一連の暗殺活動を行った。これは CIA 内部の一部門が担当していた。北朝鮮の暗殺工作は、事件の外見から、対外情報部、人民軍総偵察局が行ったものであろう。韓国の国家情報院は、今回の暗殺の後、北朝鮮国家政治保衛部と外交部が聯合して行った工作である、と直ちに発表した。スパイが極めて不足しているのは、情報世界では常識となっている。長年の観察の結果、KDR は、韓国国家情報院が北朝鮮問題を分析する最適な情報機関で

あるとは思わない。

「見えない戦線」「原形卒露」「凋落した梅花」（註：映画の題名）等を含め、大量の北朝鮮の映画は、国家政治保衛部の活動を描写している。彼らは、反スパイ活動、内部統制に従事しているだけである。国家政治保衛部が国外で暗殺を行った事例を扱った映画はない。

金正日家族は心臓病を有する家系である。したがって、もし飛行場で金正男を暗殺したならば、法医学者は金正男の死因を心臓病と断定した可能性が極めて高い。

2. **KDR** は、約 12 年前から、金正男が香港の某家でスパイ用品を扱う商店を経営していたのを知っていた。彼は、第三世代の盗聴器等を売っていた。これは普通のスパイ用品販売店ではない。西側国家で生産されたスパイ用品専門の商店である。したがって、**KDR** は、金正男はスパイ技術をよく知っており、北朝鮮ビザでマレーシアを訪れる危険性も知っていた、と見ている。したがって行先は不定で、暗殺者は商売或いは色仕掛けで金正男をマレーシアに誘い出し、有効に追跡できないまま、飛行場で暗殺した可能性が極めて高い。金正男は必ず飛行場に現れるからである。

金正男を暗殺した具体的な動機について、**KDR** はここでは多くは書かない。しかし **KDR** の説明は明確である：100%北朝鮮の行為である、と。なぜなら、情報界は金正男が北京及び澳門で何度も暗殺の危険に遭遇したのを知っており、しかも平壤を指していた。これは一般の伝聞情報ではなく、情報界の権威ある文献に基づいている。

なぜこの時期に金正男を暗殺したのか？以下は、**KDR** が最近報道した背景である。読者は覚えていると思う。北朝鮮の対外、対内政策の諸々の具体的行動の善し悪しは、中朝関係がバロメーターになる。

背景の一、**KDR** は、2014 年以来、中国軍内部の文献で、北朝鮮人民軍を仮想敵としているのを発見した。このような状況は過去にはなかった。直接人民軍を名指しして、核ミサイルが中国の脅威である、核施設が中国を拉致している、等等。解放軍の内部文献では北朝鮮核は”C 核問題”と名付けられている。

背景の二、中国軍が北朝鮮を仮想敵と見るのは、理論上だけでなく、実戦での配備にまで触れている。

KDR は、ホロンバイルに進駐した H-6 爆撃機、延吉飛行場には J-10 戦闘機が配備されたことを報道した。この配備変更は、明らかに北朝鮮の核開発とミサイルが地域のパワーバランスを改変したことに対処するためである。

このことは、中朝関係が質的变化を始めたこと、すなわち北朝鮮が中国の”敵対国家”になったことを意味する。この情報を北朝鮮は知っているのか？知らなければならない。

したがって、**KDR** の判断は次の通り：金正恩政権は、過去の如何なる時期より

も、中国の”換人計画”を恐れている可能性が極めて高い。しかも一旦その日が到来したならば、たとえ金正男が政治に関心がなかったとしても、中国及び外国の北朝鮮反対派勢力によって政治利用される可能性が高かった。

背景の三、最近本誌は、北朝鮮の政治標語、音楽芸術の話題に注意し始めた。あるバイオリン協奏曲の題名「我々は、代々貴方に忠誠を尽す」（金正日時代に創作され、KDR 総編集が演奏している。ANDREI CHANG のフェースブックで見ることが出来る）であり、ここで強調しているのが”代々”であることに注意して欲しい。北朝鮮の世襲制度について、はやすでに代々世襲の問題を宣伝していることが分かる。もしそうになると、金正恩は彼の後継者を考えなければならない。金正男の子、金韓松には確かに生命の危険が存在する理由である。三月の北朝鮮の映像を見ると、金正恩の肥満は進行している。正常な健康状態を逸脱している。タバコもやめない。これは健康でない証拠である。

次に、北朝鮮メディアは、何度も”朝鮮がなければ、地球は存在意義がない”と宣伝している。このような思想は、ヒトラー後期の”集団神経病”と極めてよく似ており、危険である。

次に、多くの情報チャンネルのニュースを総合すると：金正恩の執政以来、上層部の粛清、左遷が異常に激しく、人事政策が父親や祖父とは完全に異なっている。KDR の判断では：北朝鮮指導部内部の闘争がますます激烈となり、彼らは金正恩を相互に利用している。恐怖政治の結果、指導者の周囲は、小人達に囲まれている。随の煬帝周囲の家臣をみれば良くわかる。

現在、金正男が殺され、中朝関係は実質的に変化した。北朝鮮と核開発加速問題を結びつけ始めた。同様に過去 3 乃至 5 年間に、北朝鮮は ICBM、中距離弾道ミサイル、核弾頭の開発を大々的に強化した。スピードと技術の進歩は明らかに信じがたいほどだ。核弾頭の小型化、ロケットの固体燃料の運用等も着実に推進している。

KDR の北朝鮮 ICBM に対する判断は、評価が低すぎた可能性が高い。KDR は、現在次のように考え始めている：あと少し努力すれば、北朝鮮は、射程 7000KM から 10000KM の戦略ミサイルの開発に成功する可能性がある。また核弾頭を搭載できるようになる。このことは米国及びカナダが有史以来初めて非理性的な第三国から核兵器、ミサイルの直接攻撃を受けることを意味する。米国を攻撃する北朝鮮の核ミサイルは、技術的欠陥があるので、一旦カナダに落下すると、カナダの国家安全が重大な脅威を受けることを意味する。この点を十分考慮しなければならない。

小型核弾頭、中距離固体燃料ミサイル或は ICBM の開発に成功した国家は、極端な非理性的思考方式に走り始めるであろう。

同時に KDR は、毎年行われる米韓連合軍の大規模軍事演習は当然縮小すべきであると考えている。なぜ北朝鮮を刺激する必要があるのだろうか？レーガン大統領が当時スターウォーズ計画でソ連を引き倒したようにできるのだろうか？

20 世紀以来の外交歴史の中で、一国の指導者が実兄を暗殺した例はあるのだろうか？叔父を粛清した例はあるのだろうか？マレーシア外交官は拘留したのか？これらの非理性的行為は核政策を左右するのだろうか？”必要なとき”あえて核のボタンを押すのだろうか？

現在、外部環境は、朝鮮半島危機激化の方向に導いている。金正男が暗殺された後、本誌総編集は、多くの日本及び米国の戦略専門家と朝鮮問題を討論した。両者の意見の違いが大きいことに注目してほしい。

KDR が提出した問題は同じである：朝鮮の核、難民流出、どちらの方に関心があるか？

多くの日本の戦略学者は：日本が特に関心があるのは、難民流出問題である。したがって北朝鮮の現状維持が望ましい。北朝鮮の核兵器がどのように発展するかに関わらず、現在の北朝鮮の核兵器はすでに日本の脅威となっている。中国が北朝鮮問題解決を支援するのが最も良い方法である、と。

本誌の日本軍事問題高級顧問清谷幸一は、この種の見方の代表である。彼は：米国の北朝鮮に対する武力攻撃に反対する。そうになったら大量の北朝鮮難民が海上を漂流することになる、と。日本は如何に対応するのだろうか？

米国の学者は全く別の見方をしている。彼らは核兵器の米国への直接脅威を高度に重視し、難民問題は、米国の対北朝鮮政策の中では優先項目には入っていない。米国の極東軍事問題専門家である RICHARD FISHER は、KDR に対し次のように説明した：長くても 1 乃至 2 年で、北朝鮮は核弾頭を ICBM に搭載できるようになる、と。

米軍内部では、何度も北朝鮮核施設への攻撃問題が研究された。過去は理論的研究のみであった。現在は、ますます実戦的研究が進められている。これは秘密ではない。20 世紀以来の米国の対外政策史を縦覧すると、一旦ある勢力が真に米国本土への直接脅威を形成すると、米国は躊躇せず軍事的手段を選択する。或は自分の考えを押し通す。例えばアフガンのタリバン、第二次イラク戦争である。米国はイラクが化学兵器を保有していると疑っていた。

20 世紀全体を通じ、朝鮮半島は米国の戦略的注目点ではなかった。しかし、もし米国が北朝鮮を真に米国本土に対する核攻撃を実施する軍事力があると認めた場合には、ワシントンの対北朝鮮軍事政策はどのように変わるであろうか？集団行為学の角度から北朝鮮を分析すると、当時のナチスの軍事政策、特に 1945 年のヒトラーの病態心理が注目に値する。

類人猿の時代から、人類の攻撃活動は、以下に述べる心理活動の制約を受けていた：

1. 自ら脅威を感じ、率先して武力を行使する。その心理活動の前提は：先に制すれば、戦いに勝てる。太平洋戦争の日本軍人の攻撃心理である。
2. 攻撃したい、しかし自らが徹底破壊されることを憂慮する。したがって敢て手を出さない。冷戦時代の米ソの”相互確証破壊”戦略はこのような心理を映し出した。
3. 人類で最も危険な攻撃心理は、自ら徹底破壊されるのを恐れないことである。

一か八かの自殺である。しかもワンセットの思想を持ち、しかも”理論”に依拠していた。最悪の思想の持ち主は1945年のベルリン戦役期間のヒトラーである。彼は、最後に”アーリア人の優越”論がすでに徹底して破滅したことを認めた。”劣等民族”によって打ち負かされた民族（ドイツ人）は自ら”劣等”であった。したがってもはや生存価値はなかった。ベルリン戦役期間、ソ連軍とドイツ軍は地下鉄道で戦った。数十万のドイツの市民も地下鉄道に避難していた。ヒトラーは放水を命じた。戦時の軍工生産部長は絶対反対した。ヒトラーは以上の表明を行った。

なぜ”朝鮮のない地球は、存在意義がない”と叫ぶのであろうか？このような思考論理はどの程度危険か？もしベルリン戦役期間、ヒトラーが原子爆弾を持っていたら、必ず使用したであろう。第一、彼はすでにナチス政権を全く顧慮しなくなっていた。”人種の弱肉強食”の”集団精神病”理論に基づいて、多くの国家を破壊し、ユダヤ人を含む多くの国民を殺害した。次に、彼は最終的に徹底報復されるのを恐れず、ドイツ国民に壊滅的代価を払わせた。なぜなら、”ドイツ人は、すでに劣等民族に陥ったので存在価値がなかった”からである。もし北朝鮮版のナチス最終論理が形成されたならば、金政恩は躊躇なく核兵器を使うことを意味する。たとえ米国の核報復によって北朝鮮全体が徹底破壊されるのを知っているとしても。すなわち一旦彼の政権が危機に瀕した場合、彼は躊躇なく自殺的核攻撃を選択するであろう。”金家のない北朝鮮は存在意義がない”からである。

核兵器が存在する朝鮮半島は、内外の要素を考えると、過去の如何なる時期よりも危険である。

以上